

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 23 日現在

機関番号：23101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463285

研究課題名(和文)介護をしながら働く女性看護師のワーク・ファミリー・コンフリクトの規定要因と課題

研究課題名(英文) Related factors and challenges of work family conflict for female nurses caring for elderly family members

研究代表者

高林 知佳子 (Takabayashi, Chikako)

新潟県立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：20637631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：親の介護をしながら働く女性看護師のワーク・ファミリー・コンフリクト(以下WFC)を測定する尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討し、WFCの規定要因を明らかにした。調査の結果、16項目4因子構造の尺度の信頼性と妥当性が確認され、【仕事領域の役割のために介護の役割が果たせない葛藤】の因子は、労働負荷の大きさと関連し、【介護の役割のために仕事領域の役割が果たせない葛藤】、【介護の役割のために家庭の役割が果たせない葛藤】の因子は、介護のために夜中に起きることと関連することが明らかとなった。WFCの低減に向け、職場と地域で支援していく必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We developed and tested the reliability and validity of the work family conflict (WFC) scale for female nurses caring for elderly family members and clarified the factors that regulate WFC. The results of this survey established the criterion-related validity, reliability, construct-related validity, and reproducibility of WFC scale for the assessment of female nurses caring for elderly family members. We assessed four key themes consisting of 16 items. We found a significant correlation between the factors “failure to care due to work” and “large labor burden.” We also found a significant correlation between “failure to work due to caring,” “failure to perform family duties due to caring,” and “waking up during night for nursing duties.” The results of this study suggested a need for additional support at workplace, home, and community to reduce WFC.

研究分野：基礎看護学

キーワード：ワーク・ファミリー・コンフリクト 介護 両立 看護師 尺度開発

1. 研究開始当初の背景

わが国の高齢化は世界に類をみないスピードで進み、増加する「要介護高齢者」の介護をいかに担っていくかが日本の重要な課題となっている。在宅で生活する要介護者の家族の身体的、精神的負担は大きく、介護者の多くは健康不安を感じ、半数以上の介護者が介護による変調をきたし、介護者の4分の1は介護に対する経済的問題を抱えていることが報告されている¹⁾。さらに、就労介護者は、仕事と介護と家事に時間が拘束され、帰宅後は介護に追われる等の困難感を抱き、介護離職者は、離職後に経済的・精神的・体力的負担が増したとの報告もみられる¹⁾。

一方、高齢の親を持つ看護師は、専門職としてのキャリアを積んだ重要な戦力としてスタッフを教育し、看護組織を牽引する貴重な人材にあてはまるが、親の介護をしながら働く看護師が、介護を理由に離職していくことは、看護組織にとって歴大な損失になる。また、看護師に占める女性の割合が非常に高いことや、日本の働く女性は家事分担の不公平感が男性より強い傾向にある²⁾ことをふまえると、親の介護をしながら働く女性看護師の仕事と家庭の葛藤の現状を把握し、これらの葛藤を低減させるための課題を明らかにする重要性は極めて大きい。

仕事と家庭の各領域から発生した役割のプレッシャーが、ある時点で相互に矛盾する不適合状態に陥った時に発生する葛藤は、ワーク・ファミリー・コンフリクト (Work-Family Conflict : 以下、WFC) と言われ、「仕事領域から家庭領域への葛藤」と「家庭領域から仕事領域への葛藤」の2つの方向性と、時間・ストレス反応・行動に基づく葛藤の3つの形態からなる6次元で構成されるとGreenhausら³⁾は定義している。Carlsonら⁴⁾は、この6次元モデルを用い6下位概念の質問項目からなるWFC尺度 (Work-Family Conflict Scale : 以下、WFCS) を開発し、渡井ら⁵⁾がその日本語版を作成している。

WFCS日本語版を用いた看護師のWFCの研究はいくつか報告されており^{6)~7)}、その中には育児をしながら働く看護師を対象とした研究もみられる⁸⁾。しかし、親の介護をしながら働く女性看護師は、働きながら仕事と家庭を両立していたところに、親の介護という大きな問題が突然加わり、「子の成長」というゴールがみえやすい育児と異なり、先が見えない状況に在ることをふまえると、「仕事領域から家庭領域への葛藤」と「家庭領域から仕事領域への葛藤」の2つの方向性による測定が、親の介護をしながら働く女性看護師のWFCの評価につながるのか疑問に感じられた。しかし、親の介護をしながら働く女性看護師に特化し、WFCを測定する尺度を開発した研究はなされていない。尺度が開発されたならば、他の調査と併せて測定することで、介護によって追い込まれる女性看護師

の時間的、経済的、精神的な問題の所在をはじめ、家庭領域や仕事領域におけるWFCの関連要因を明らかにすることは喫緊の課題といえる。

2. 研究の目的

本研究は、質的研究及び量的研究により親の介護をしながら働く女性看護師のWFCを評価する尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討する。さらに、尺度並びに家族状況、介護状況、職場の支援状況、社会資源の活用状況等も含めた全国調査を実施し、介護をしながら働く女性看護師のWFCの規定要因を明らかにし、仕事と家庭の葛藤を低減させる職場環境並びに家庭環境を整えるための課題を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 親の介護をしながら働く女性看護師のWFC尺度原案の作成目的で、仕事領域の役割と家庭領域における役割が十分果たせないことで感じる葛藤や、家庭領域の中で介護の役割とその他の役割が十分果たせないことで感じる葛藤について、A県内で親の介護をしながら働く女性看護師11名を対象に、半構成化したインタビューを実施する。

質問項目の内容的妥当性を検討・確保するために、看護部長の経験があり、修士以上の学位を持つ看護管理学の専門家2名に質問項目の検討を依頼する。

質問項目の表面妥当性を検討するために、親の介護をしながら働くまたは過去にその経験を持つ女性看護師8名、高齢の親を持つ女性看護師10名に対するプレテストを実施し、回答のしづらさや表現のわかりにくさについての意見を求める。

(2) 内的整合性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を検討するための1次調査を、全国の病院(小規模・中規模・大規模含む)の女性看護師3,000人を対象に行う。サンプリングは、平成25年医療施設(動態)調査・病院報告の概況⁹⁾、平成25年医療施設(動態)調査¹⁰⁾を用い、地域や病床の規模に偏りがなく1,500施設が抽出されるように層化多段抽出を行う。

調査内容は、属性：年齢、職位、病院規模、要介護者の続柄、要介護者との同居の有無と介護認定状況を確認した。親の介護をしながら働く女性看護師のWFC尺度原案を用いWFCを尋ねる。質問形式は、Carlsonら⁸⁾のWFC尺度、渡井ら⁹⁾の日本語版WFC尺度に準じ、まったくそのとおりである、ほぼそのとおりである、どちらともいえない、あまりあてはまらない、まったくあてはまらない、の5段階リッカートスケールで回答を求める。

基準関連妥当性の検討に用いた外的基準は、WFCS日本語版と抑うつ度及び蓄積疲労との間に関連がみられていることから⁹⁾、1次調査の質問紙に、抑うつ度を測定するCES-D

日本語版 20 項目、蓄積疲労を測定する CFSI-18 を外的基準として加え、さらに WFCs 日本語版も外的基準とする。

分析方法は、各変数の基本統計量を算出し、天井効果・フロア効果の分析、I-T 分析、項目間相関分析を行う。次に、作成した尺度原案の探索的因子分析を行い、尺度全体と各因子の Cronbach's 係数を算出し検討する。また、因子構造の妥当性を評価するために、検証的因子分析を行う。モデル適合度は、 χ^2 値/自由度、比較適合度指標(CFI)、標準化 2 乗平均残差(SRMR)、平均 2 乗誤差平方根(RMSEA)、赤池情報量基準(AIC)の値で確認する。また、原尺度作成の妥当性評価手順に倣い、尺度原案の概念モデルである 4 因子モデルと探索的因子分析の結果から抽出されたモデルについて比較検討する。最後に、基準関連妥当性の検討するために、CES-D 日本語版、CFSI-18、WFCs 日本語版を外的基準とし、本尺度の総得点及び各因子得点とのピアソンの相関係数を算出する。

(3) 再現性を検討するための 2 次調査を全国の病院(小規模・中規模・大規模含む)の女性看護師 1,500 人を対象に行う。サンプリングは、1 次調査対象施設を除いた 750 施設を 1 次調査と同様の手順で行う。質問紙は、1 回目と 2 回目の間隔を 10 日間とする。

調査内容は、1 回目は、対象者の属性(年齢、職位、勤務する病院の規模、介護を要する親の続柄と介護認定状況)、尺度原案とし、2 回目は、尺度原案のみとし、分析は、尺度全体及び下位尺度の得点について級内相関係数を算出する。

(4) 介護をしながら働く女性看護師のワーク・ファミリー・コンフリクトの規定要因を明らかにするための 3 次調査を、全国の病院(小規模・中規模・大規模含む)の女性看護師 3,000 人に行う。サンプリングは、1 次調査及び 2 次調査対象施設を除いた 1,500 施設を 1 次調査と同様の手順で行う。

調査内容は、属性として年齢、職位、病院規模、要介護者の続柄、要介護者との同居の有無と介護認定状況とする。また親の介護をしながら働く女性看護師の WFC は、親の介護をしながら働く女性看護師の WFC 尺度、介護に関する状況(同居の有無、主となる介護者が自分か否か、夜間の介護の必要の有無、受診の付添い、介護の協力の有無、家事の協力の有無、家族との会話時間、家族との夕食回数、ケアマネージャーへの相談の有無、相談する相手の有無、近所からの協力の有無、自分の時間の有無)、仕事や職場の状況(通勤時間、就業継続意思)とする。さらに、中央労働災害防止協会の「快適職場調査(ソフト面)従業員用」35 項目¹¹⁾も尋ねる。「快適職場調査(ソフト面)従業員用」35 項目は、領域 1【キャリア形成・人材育成】、領域 2【人間関係】、領域 3【仕事の裁量性】、領域 4【処

遇】、領域 5【社会とのつながり】、領域 6【休暇・福利厚生】、領域 7【労働負荷】の 7 領域からなり、5 件法で回答する。

分析は、中央値以上を高群、それ以外を低群とし、介護をしながら働く女性の WFC の各因子得点 2 群と、介護状況、職場状況の項目との単変量解析(説明変数のデータの種類に応じて t 検定、 χ^2 検定等)を行う。次に、単変量解析で有意差($P < 0.05$)が認められた項目を独立変数、介護をしながら働く女性の WFC の各因子得点を従属変数とするロジスティック回帰分析(強制投入法)を実施する。以上の分析結果をふまえ、仕事と家庭の葛藤を低減させる職場環境並びに家庭環境を整えるための課題を検討する。

(5) 倫理的配慮として、インタビュー調査協力者には、調査の趣旨、協力の任意性、匿名性の保持等を文書と口頭で説明し、書面にて同意を得る。1 次調査、2 次調査、3 次調査の質問紙調査対象者には、上記内容を文書にて説明し、返送をもって同意とみなす。本研究は新潟県立看護大学の倫理委員会の承認を受けて実施する。

4. 研究成果

(1) インタビュー調査

インタビュー調査は、平成 26 年 11 月から 12 月に実施した。インタビューの記述的データから親の介護をしながら働く女性看護師の WFC に関する 484 の発言内容を抽出し、32 サブカテゴリー、4 カテゴリーに集約し、「仕事領域の役割のために介護の役割が十分果たせない葛藤(以下、仕事 介護の葛藤とする)」、「介護の役割のために仕事領域の役割が十分果たせない葛藤(以下、介護 仕事の葛藤とする)」、「介護の役割のために家庭の役割が十分果たせない葛藤(以下、介護 家庭の葛藤とする)」、「家庭の役割のために介護の役割が十分果たせない葛藤(以下、家庭 介護の葛藤とする)」の 4 カテゴリーを下位概念とした。次に、国内外の先行研究³⁾⁻⁵⁾をふまえ、時間・ストレス反応・行動に基づく葛藤に照らし合わせたアイテムプールを作成することとし、その作成は記述的データから得た親の介護をしながら働く女性看護師の WFC に関する発言内容を基盤とした。しかし、「仕事 介護の葛藤」、「介護 仕事の葛藤」の下位概念は、記述的データから行動に基づく葛藤が見出せず、一方における行動がもう一方の行動に役立っている等の内容ばかりであったため、これらを否定形にした表現にして加えた。また、「介護 家庭の葛藤」、「家庭 介護の葛藤」の下位概念は、行動に基づく葛藤の発言、もしくは一方における行動がもう一方の行動に役立っている等の発言が記述的データから見出せず、先行研究からも参考となる項目が収集できなかったため、行動に基づく葛藤の項目は加えないこととし、4 下位概念 30 項目を作成した。意

味の難解さの指摘やどのように表現すると意味が明瞭になるかの意見をもとに表現を修正し、「仕事 介護の葛藤」9項目、「介護 仕事の葛藤」9項目、「介護 家庭の葛藤」6項目、「家庭 介護の葛藤」6項目、計30項目を尺度原案とした。

(2) 1次調査

1次調査の質問紙は平成27年11月27日に郵送し、翌年1月15日までに回収した。回答者数(率)は、520人(17.3%)であった。このうち、尺度原案、基準関連妥当性の検討に用いる尺度項目に1つでも欠損値があるものを削除し、残った389票(有効回答率13.0%)を分析対象とした。1次調査対象者の年齢は、平均52.3(±6.1)歳であった。

項目分析を行い、残った項目について探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、16項目3因子が抽出された。抽出された3因子のうちの第1因子は、尺度原案の「介護 家庭の葛藤」の因子と「介護 仕事の葛藤」の因子がまとまった1因子として抽出されていた。

探索的因子分析で抽出された3因子について、全体と各因子のCronbach's 係数を算出した。全体のCronbach's 係数は0.91、各項目のCronbach's 係数は0.77~0.88であった。さらに、尺度原案である4因子を下位尺度とした場合の各項目のCronbach's 係数も同様に0.77~0.85であった。以上のことから、3因子モデルと4因子モデルのどちらにおいても、Cronbach's 係数は0.7を上回っていた。

探索的因子分析で抽出された3因子モデル、尺度原案の4因子モデルについて、それぞれ検証的因子分析を行った結果、 χ^2 値/自由度は、3因子モデルが2.977、4因子モデルは2.560であり、どちらも基準値の範囲内であった。SRMRは、3因子モデルが0.047、4因子モデルは0.043であり、どちらも非常に良好な水準であった。CFIは、3因子モデルが0.936、4因子モデルは0.951であり、4因子モデルのみが非常に良好な水準であった。RMSEAは、3因子モデルが0.071、4因子モデルは0.063であり、4因子モデルのみが基準を満たしていた。AICは、3因子モデルが370.659、4因子モデルは326.837であり、4因子モデルの方が適合度がよい結果であった。以上のことから、4因子モデルは3因子モデルに比べ、より適合度の高いモデルであることが示された。

4因子モデルは3因子モデルに比べ、よりの適合度が高かったことから、4因子モデルを用いて外的基準との相関係数を算出した。その結果、CES-D日本語版との相関係数は0.31~0.43で、すべての項目間で正の関連がみられた($P < 0.01$)。CFSI-18との相関係数は0.32~0.45で、すべての項目間で正の関連が

みられた($P < 0.01$)。WFCS日本語版との相関係数は、方向性による葛藤(「仕事から家庭への葛藤」と「家庭から仕事への葛藤」)を用いて算出した。その結果、0.37~0.61で、すべての項目間で正の関連がみられた。

(3) 2次調査

2次調査の質問紙は、平成28年5月18日に郵送し、平成28年6月30日までに回収した。回答者数(率)は、1回目の回収者数(率)は、196人(15.9%)、2回目の回収者数(率)は、174人(14.1%)であった。このうち、2回とも回収でき、欠損値のない169部のデータを分析対象とした(有効回答率13.7%)。2次調査対象者の年齢は、平均52.7(±7.0)歳であった。

4因子モデルの適合度が高かったことから、4因子モデルを用い、尺度全体及び下位尺度の得点について級内相関係数を算出した結果、尺度総得点の級内相関係数は0.96、4因子の級内相関係数は0.88~0.93であった。

(4) 3次調査

3次調査の質問紙は、平成28年11月8日に郵送し、翌年1月17日までに回収した。回答者数(率)は、537人(17.9%)であった。このうち、尺度原案、基準関連妥当性の検討に用いる尺度項目に1つでも欠損値があるものを削除し、残った480票(有効回答率16.0%)を分析対象とした。3次調査対象者の年齢は、平均52.3(±6.8)歳であった。

単変量解析の結果、介護をしながら働く女性のWFCの「仕事 介護」の因子得点2群と、「介護のために夜中に起きる」、「家族が掃除を手伝う」、「家族との会話時間」等と有意差がみられた($P < 0.05$)。「介護 仕事」の因子得点2群では、「介護のために夜中に起きる」、「受診に付き添う」、「労働負荷」等と有意差がみられた($P < 0.05$)。「介護 家庭」の因子得点2群では、「介護のために夜中に起きる」、「受診に付き添う」、「労働負荷」等と有意差がみられた($P < 0.05$)。「家庭 介護」の因子得点2群では、「介護のために夜中に起きる」、「ケアマネージャーに相談する」、「労働負荷」等と有意差がみられた($P < 0.05$)。

介護をしながら働く女性のWFCの「仕事 介護」の因子得点は、「労働負荷」(OR:1.916、95%CI:1.456~2.522)に有意な関連があった。「介護 仕事」の因子得点は、「介護のために夜中に起きる」(OR:3.237、95%CI:1.989~5.266)、「受診に付き添う」(OR:2.756、95%CI:1.446~5.255)等に有意な関連があった。「介護 家庭」の因子得点は、「介護のために夜中に起きる」(OR:2.735、95%CI:1.704~4.389)、「受診に付き添う」(OR:2.687、95%CI:1.498~4.819)等に有意な関連があった(表1)。

表1 介護をしながら働く女性のWFCの
各因子得点と介護状況、職場状況との関連

WFC因子	項目	オッズ比	95%信頼区間	P値
仕事一介護	労働負荷が大きい/小さい	1.916	1.456~2.522	.000
	介護のために夜中に起きる/ 起きない	3.237	1.989~5.266	.000
介護一仕事	受診に付き添う/付き添わない	2.756	1.446~5.255	.002
	労働負荷が大きい/小さい	1.703	1.247~2.326	.001
介護一家庭	介護のために夜中に起きる/ 起きない	2.735	1.704~4.389	.000
	受診に付き添う/付き添わない	2.687	1.498~4.819	.001
	労働負荷が大きい/小さい	1.347	1.015~1.787	.039

今後の課題として、親の介護をしながら働く女性看護師のWFCを低減させる職場環境として、介護のための休暇がとりやすい環境醸成、時間内に処理できるよう要員管理を含めた職場レベルでのマネジメントが必要である。また、家庭環境においては、介護負担の軽減に向けた支援が必要であり、中でも介護のために夜中に起きなければいけない状況下にある場合の働く女性看護師の介護負担の軽減に向けた支援が重要である。

<引用文献>

- 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング (2013): 仕事と介護の両立に関する実態把握のための調査研究事業報告書。
- 小林利行 (2013): 「結婚」や「家事分担」に関する男女の意識の違い~ISSP国際比較調査(家庭と男女の役割)・日本の結果から~ ,放送研究と調査,63(4), 44-58.
- Greenhaus J. H. , Beutell N. J. (1985): Sources and conflict between work and family roles , Academy of Management Review , 10 (1) , 76-88.
- Carlson D. S. , Kacmar K. M. , Williams L. J. (2000): Construction and initial validation of a multidimensional measure of work-family conflict , Journal of Vocational Behavior , 56 , 249-276 .
- 渡井いずみ , 錦戸典子 , 村島幸代 (2006): ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度(Work-Family Conflict Scale: WFCS)日本語版の開発と検討 , 産業衛生学雑誌 , 48(3) , 71-81 .
- 山口善子 (2012): 訪問看護師のワーク・ファミリー・コンフリクトが主観的健康感と訪問看護就業継続意志に与える影響 , 日本看護管理学会誌 , 16(2) , 111-118.
- 重本津多子 , 室津史子 (2015): 異なる組織基盤をもつ看護師のワーク・ファミリ

ー・コンフリクトと主観的職務満足に関する研究 , ヒューマンケア研究学会誌 , 6(2) , 35-40.

鈴木康宏 , 土井徹 (2015): 未就学児の子どもがいる女性看護師のワーク・ファミリー・コンフリクト: 未就学児の子どもがいる一般就労女性との比較を通して , 日本健康医学学会雑誌 , 24(2) , 114-129.

厚生労働省 (2014): 平成 25 年(2013)医療施設(動態)調査・病院報告の概況 . 総務省統計局 (2014): 平成 25 年医療施設(動態)調査 .

中央労働災害防止協会中央快適職場推進センター (1999): 快適職場システムづくり調査研究委員会報告書(最終報告書) .

大橋靖雄 , 森田智視 (2002): QOL の統計学的評価 , 池上直己 , 福原俊一 , 下妻晃二郎 , 他編: 臨床のための QOL 評価ハンドブック(第 1 版) , 21-30 , 医学書院 , 東京 .

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計 2 件)

高林知佳子 , 坪倉繁美 (2015.12.5) : 介護をしながら働く女性看護師の仕事と家庭の葛藤の現状 , 第 35 回日本看護科学学会学術集会 , 広島 (査読有)

高林知佳子 , 坪倉繁美 (2016.12.11) : 介護をしながら働く女性看護師のワーク・ファミリー・コンフリクト尺度の開発 - 信頼性・妥当性の検討 - , 第 36 回日本看護科学学会学術集会 . (東京)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高林 知佳子 (TAKABAYASHI, Chikako)
新潟県立看護大学・看護学部看護学科・准教授
研究者番号 : 2 0 6 3 7 6 3 1

(2)研究分担者

坪倉 繁美 (TSUBOKURA, Shigemi)
国際医療福祉大学・保健医療学部看護学科・教授
研究者番号 : 0 0 5 2 1 3 0 3